



1冊の建築 - 空間を作り出す1ページ -

Background

サービスを入れる「箱」とされる公共建築空間

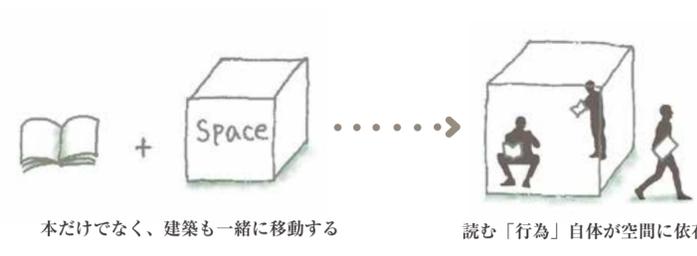
誰にも開かれる公共建築の一つに図書館がある。その中でも移動図書館が行われている。移動図書館では、本だけが専用の車に積まれ各所へ移動していき、建築は置きざりになっている。この移動図書館の現状から、公共建築空間は貸し借りのサービスを行う「箱」という役割だけを担っているように感じられてしまう。



Concept

「物」と「ふるまい」を一緒に移動する

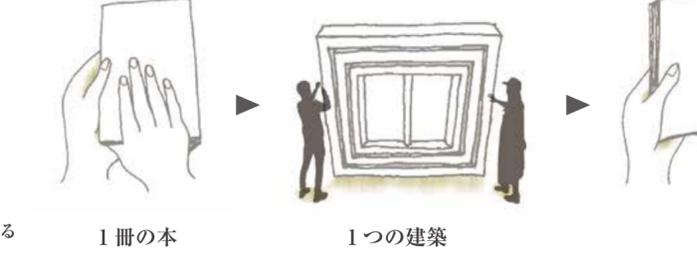
本だけでなく、建築空間も一緒に移動することで、「読む」という「行為」自体が空間に依存するようになる。本の貸し借りの単なる「場」でなく、その「空間」で本を通し、交流が生まれ、ゆっくりと時間を過ごせるような「拠り所となる」建築を提案する。



Diagram

本を開くように、建築を開く

本と共に移動し、本のように開くことができる建築を提案する。本のように閉じることでコンパクトに収納して移動させることができる。移動した先で建築を開くことで空間が生まれる。屋内に移動したときは一つの小さな部屋のように、屋外に移動したときはパーゴラのように人々の居場所となる空間を生み、生まれた空間には人々が集い、思い思いの時間を過ごす。また、読書空間以外にも、公園やホールなど多様な場所に対して、開き方を変化させることで柔軟に対応することができる。



1冊の本 1つの建築 本を開く 建築を開く 空間が生まれる

可動域による空間性の変化

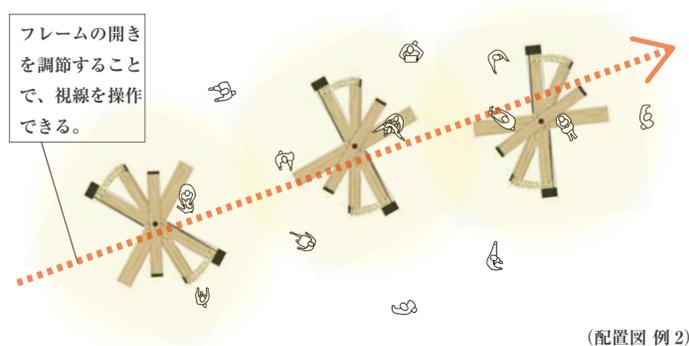
最大展開による「個」としての空間

クロスフレームを最大まで広げると内部が開かれて、1つの空間としてより意識される。フェルトの隙間から内部空間が見えるため、外部の気配を感じることができる。



最小展開による空間の連続性

クロスフレームを閉じると視線が通りやすくなり、配置空間に方向性をつけることができる。また、複数並べることで、連続する次の空間への期待感を生む。



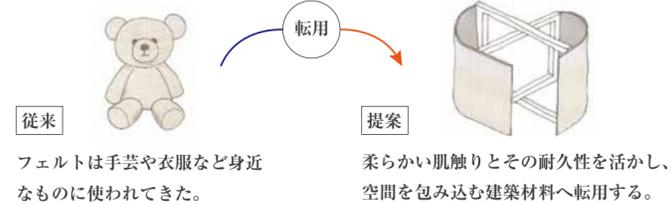
新素材と歴史的素材の融合

フェルト生地による空間

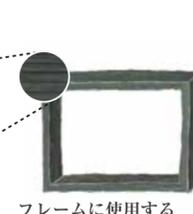
フェルト生地は保温性、防火性、通気性に優れ、また軽量で柔軟性に富む。製造方法によって密度、硬軟、厚みなどを自由に作成できるため、建築材料としての可能性を秘めていると考える。



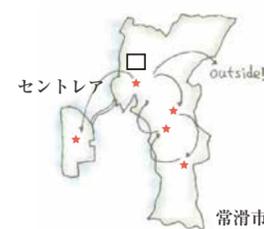
身近な材料を建築材料へ



黒壁を化粧材として使用する



調和と発信

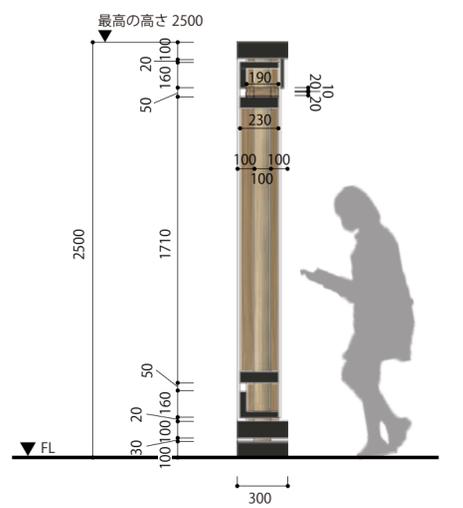


常滑は近海の立地により、塩害を防ぐため、コーラールと呼ばれる塗料が塗られた黒い壁の建物が町並みを作り出している。歴史的な背景のあるこの素材を常滑のアイデンティティと考え、デザインに取り込む。

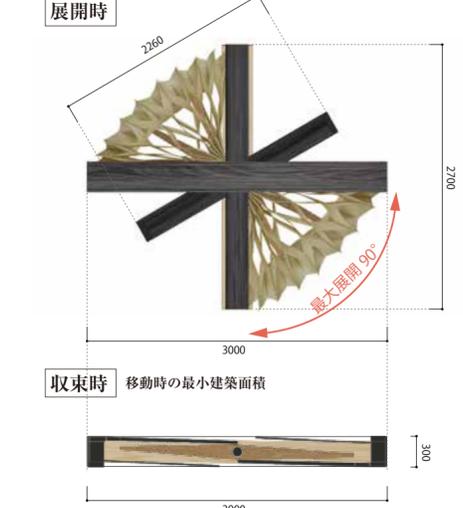
黒壁を建築素材として用いることで、常滑の町並みに調和する。また、この建築が移動することで多くの人の目に触れ、常滑のアイデンティティの発信のきっかけにつながる。



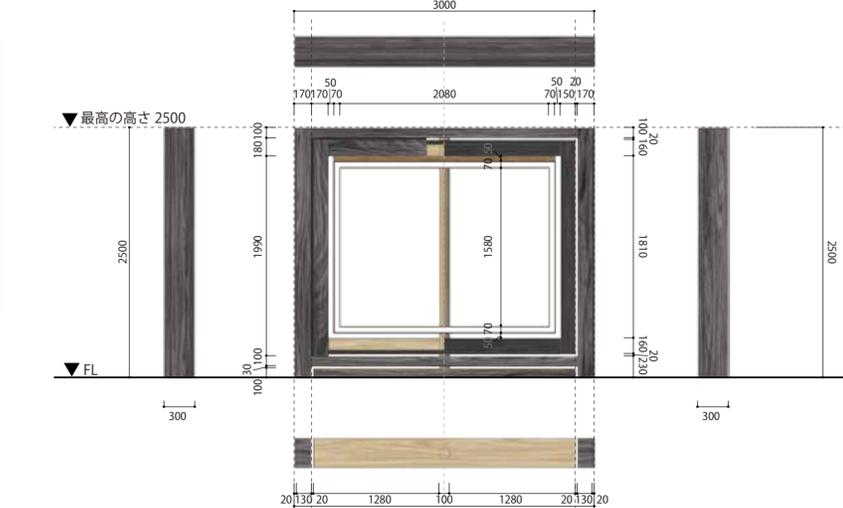
Section Scale=1/30



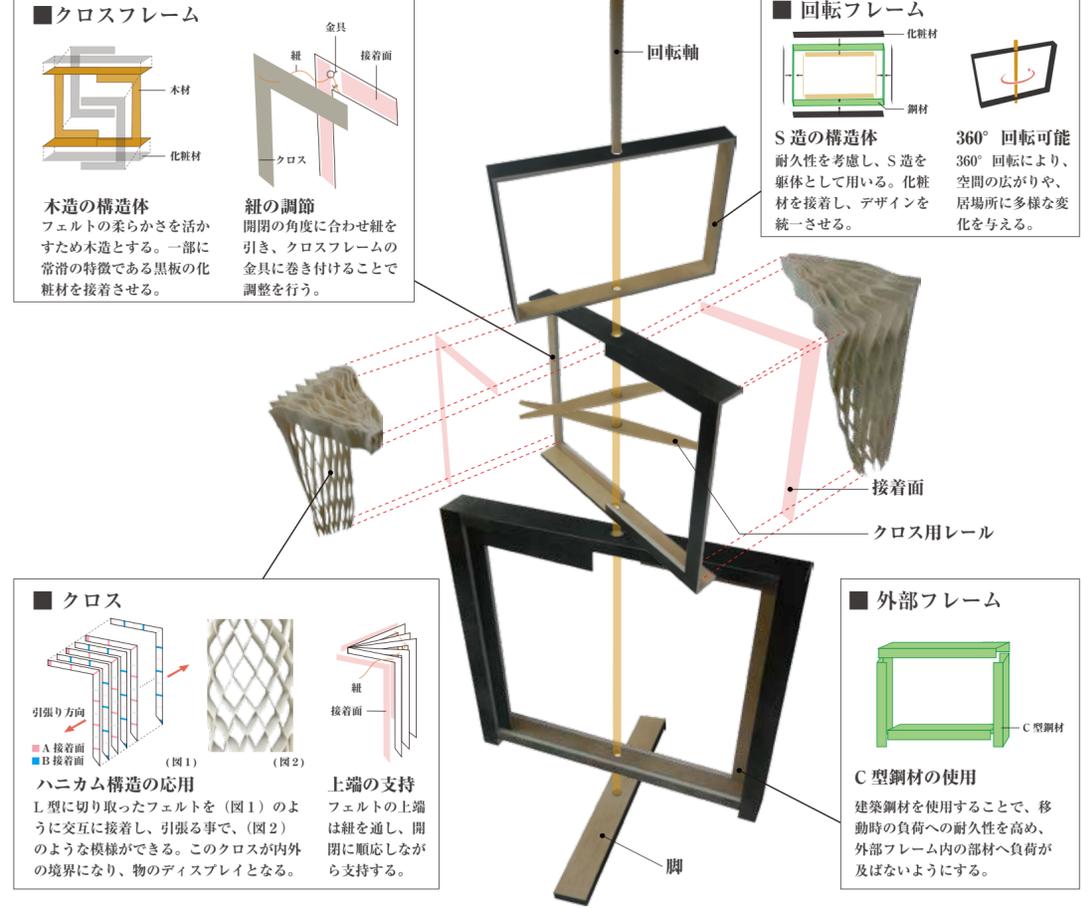
Development Scale=1/50



Elevation Scale=1/50



Construction



Sequence

